

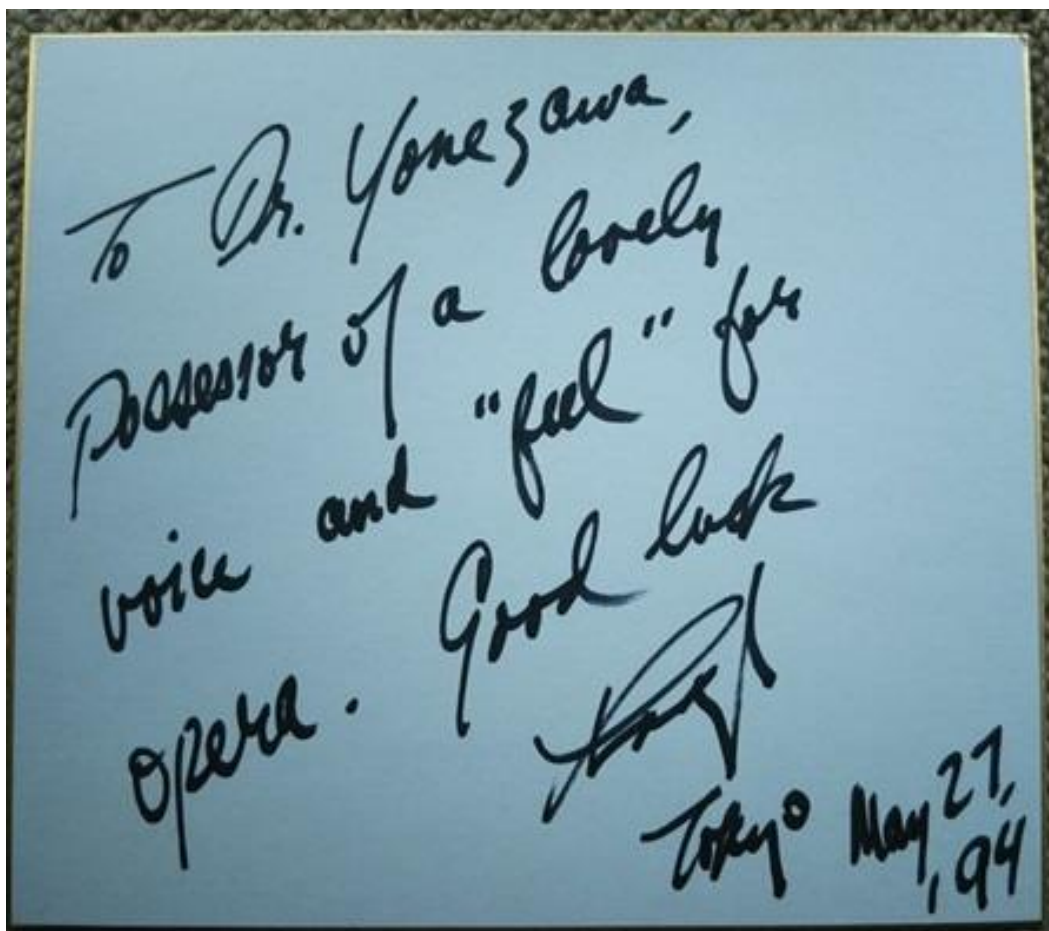
私の音楽活動のひろがりへの道

このホームページの「プロフィール」のページの下部に、「日本の演奏家-クラシック音楽の 1400 人」という本が紹介され、小澤征爾さんや辻井伸行さんと一緒に、「米澤傑(医学者, 声楽家(テノール) 鹿児島大学大学院医歯学総合研究科教授)」が掲載されているのをご覧いただけます。その私の項の「印象に残る人物、目標とする演奏家」に、「井上道義、松本美和子 — 人柄の素晴らしさ」と掲載されていますが、まさに、そのお二方との“出会い”と“ご縁”により、私の音楽活動の場が広がったと申し上げても過言ではありません。

私は、CD「誰も寝てはならぬ / 米澤 傑 テノール・オペラアリア集」を発行する前に、1993年には、幾つかの演奏会での私の歌の録音を集めた「米澤傑 テノールコンサート」というCD(収録曲の多くのピアノを、妻の米澤悦子が担当しています)を自費出版しています。このCD「米澤傑 テノールコンサート」には、井上道義先生の『(1)この国に生まれなかったら、傑はホセ・カレラスのはずだった！ (2)神に与えられた才能とほんの少しの努力。これが本当の歌う喜び！ (3)日本中のテノールよ、嫉妬しろ！ 井上道義(指揮者、テノール発掘人)』というご推薦のお言葉が掲載されています。



この CD をお聴きくださいました世界最高の指揮者のロリン・マゼール先生は、色紙に、「To Dr. Yonezawa, Possessor of a lovely voice and "feel" for opera. Good luck」というお言葉をお書きくださり、サインをしてくださいました（下記、参照）。



井上道義先生との“出会い”は、井上先生が、1985年に開催されました鹿児島で初めての「かごしま県民第九演奏会」の指揮をなさったことに始まります。この演奏会のソリストはオーディションで選ばれました。テノールに課された「課題」は、マーチの部分のテノールソロでした。このテノールソロを歌うのは大変に難しく、音楽大学の声楽科出身の方々も沢山オーディションをお受けになりましたが、このテノールソロの部分を最後まできちんと歌い通すことが出来たのは、私一人のみで、私がソリストに選ばれました。翌年の1986年に、井上道義先生からお声掛けを頂き、私がテノールソリストとして出演しましたNHKの「第九をうたおう」という番組のテキストの別冊楽譜には、このテノールソロの部分に、井上先生が「この部分のテノール独唱を完璧に歌えたら、超一流といえます。」とお書きになっているほど確かに難しいです。オペラアリアのように自然に声が出しやすい“声楽的”な音譜配列ではなく、交響曲の“器乐的”音譜配列になっているのが、その一因であると、私は解釈しています。

「第1回かごしま県民第九演奏会」の本番の2ヶ月ほど前に、井上先生が鹿児島にお越しになり、オーケストラや合唱団のレッスンをなさるとともに、会場の鹿児島県文化センター（宝山ホール）で、ソリストへもレッスンをしてくださいました。レッスン途中で、私が、マーチの部分のテノールソロを歌い始めた途端、井上先生は指揮をやめて、ピョンと舞台から飛び降り、ホールの最後部まで走って行って、腕を組んで、私のソロを聴いていらっしやいましたが、その時は何もおっしゃいませんでした。おそらく、私の声が「そば鳴り」ではなく「いかに遠くまで響くか」ということをお確かめになっていらしたと想像しています。本番を無事に終えた後の食事会で、私は、ちょうど、井上先生の真向かいの席に座っていました。やはり、井上先生は、特に何もおっしゃらず、ただ、私の眼をじっと見続けていらしたので、私も視線を反らしてなるものかと、ずっと見返していました。しばらくして、井上先生は、私の眼を見続けたまま一言おっしゃいました・・・「あんた、気が強いネ!」。その時は、それ以上何もなかったのですが、翌年の春、大学の教室に電話があり、秘書が「井上さんという方からお電話です」というので出てみましたら、「井上道義です。今度、NHKで“第九をうたおう”という番組をつくるので、米澤さんにテノールのソリストをお願いしたい。」とおっしゃってくださいましたので、喜んでお受けし、東京のNHKに何度か通い、二期会の歌手の方々と一緒にソリストを務めました。

そのNHKの“第九をうたおう”が全国放送され、第九アジア初演の地である私の生まれ故郷の徳島県鳴門市で、毎年、全国から合唱団員が集って開催される「第九演奏会」の関係者の目にも留まり、「鳴門の第九」にもテノールソリストとして招聘されることになりました。それが、このホームページの『道中二足のわらじ』に掲載されます「イタリアデビューを断るといった面白いお話」で述べられている松本美和子先生との“出会い”に繋がってゆきます。

「ロリン・マゼール氏との出会い」

全世界に放送されるウィーンフィルのニューイヤーコンサートの指揮を度々なさったような世界最高の指揮者でいらしたロリン・マゼール氏（Lorin Maazel, 1930年3月6日 - 2014年7月13日）と、私がどのようにして知り合ったかについて述べます。

私の知合いのピッツバーグ大学医学部教授が、ロリン・マゼール氏のお父様のリンカーン・マゼール氏（Lincoln Maazel, 1903年2月12日 - 2009年9月15日、アメリカの歌手であり、舞台とスクリーンの俳優でした。彼は、2003年に百歳になり、6年後の2009年9月15日、米国バージニア州キャッスルトンで106歳で亡くなりました。）を良く知っていらして、私の最初の自費出版CD「米澤傑 テノールコンサート」を差し上げたところ、「息子にも1枚」ということで、私のCDがロリン・マゼール氏の手に渡り、すぐにお聴きくださいまして、サントリーホールでのコンサートの後、楽屋を訪ねることになりました。私達より前に、有名な方々が楽屋をお訪ねでしたが、その方々と

は入口で二言・三言、言葉を交わされただけでした。しかし、その後、私と家内が楽屋をお訪ねしましたら、「まあ、中に入れ」ということで、楽屋に招き入れてくださり、かなり、いろいろなお話しをして、色紙に、写真のようなお言葉とサインをお書きくださり、写真にまで一緒におさまってくださいました。

お父様のリンカーン・マゼール氏からは、米国から私の自宅にお電話を頂き、私の声をお褒めくださりながら、「トスカの“星も光りぬ”のレシタティーボの部分は、このように歌った方が良い・・・など、ご自分で、いろいろなオペラアリアの一部を口ずさんでアドバイスをくださる等、かなり様々なこととお話ししました。

まさに、私の「宝物」とも言える貴重な体験でした。

(2021年8月31日記)